

磯丸の生涯

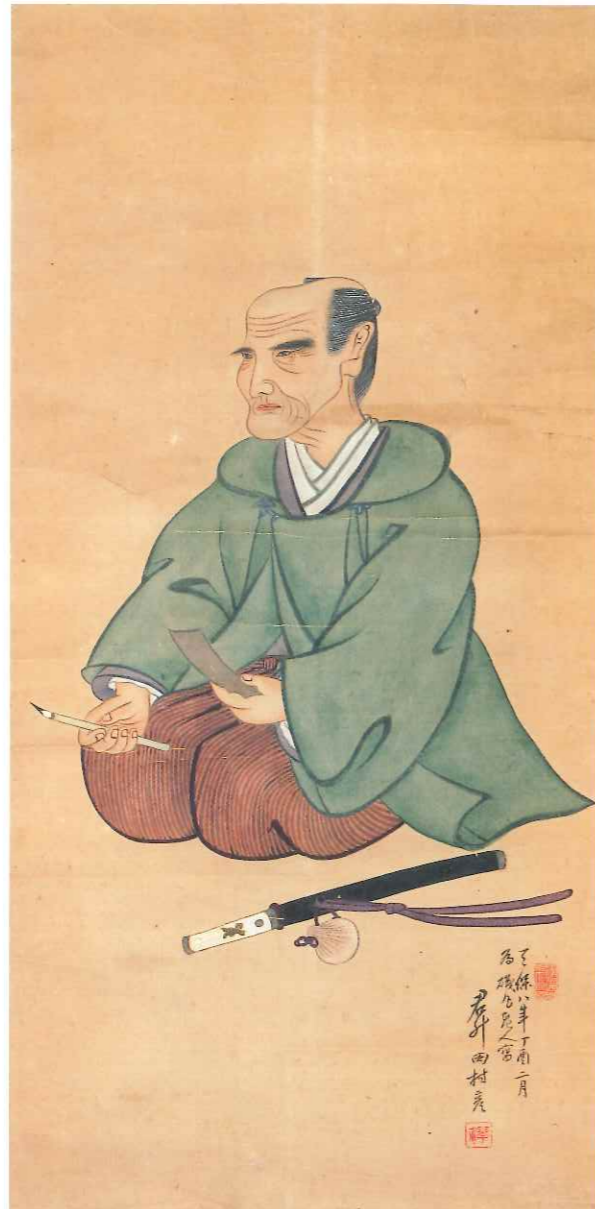
◇親孝行な磯丸と三人の師

糟谷 磯丸

[かすやいそまる]
1764-1848

糟谷磯丸は、江戸時代、明和元年(1764)5月3日に現在の伊良湖町で漁師の家の長男として生まれました。31歳で父を亡くし、母は長い間病気でした。親孝行の磯丸は、母の病気が治るように3年間近くの伊良湖神社に毎日お参りをし、そのかいあってやがて母の病気は良くなりました。磯丸が和歌に興味を持ったのは、ちょうどこの頃で、伊良湖神社にお参りする旅人たちが歌を口ずさむのを聞き、その短い言葉の中に不思議な魅力を感じたためでした。磯丸は、もともと漁師で文字を書くことができませんでしたが、努力し歌を作るようになりなりました。そして現在の亀山町に住んでいた大垣新田藩の役人、井本常蔭に文字や和歌の教えを受け、「磯丸」という名前をもらいました。その後、吉田(現在の豊橋市)の女性の歌人、林織江が伊良湖へ旅をしたときに磯丸が世話をしたのがきっかけで、織江の先生であった京都の芝山大納言持豊の弟子になり、「貞良」の名前をもらい、ますます歌がうまくなっていきました。

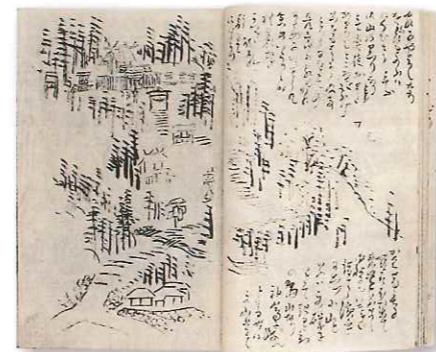
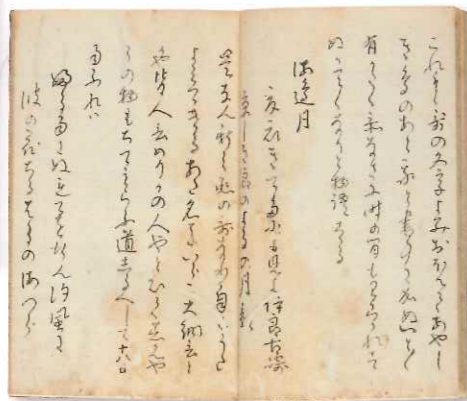
磯丸は旅が好きで、三河各地をはじめ、南信州、静岡、遠くは京都、伊勢、尾張、江戸などにも旅をしています。また、田原の殿様に呼ばれ、田原城の月見で歌を詠んだり、天保4年(1833)には、同じ時代を生きた渡辺華山に面会したこともありました。



糟谷磯丸肖像 君升田村彦画 天保8年(1837) 個人蔵



伊良古之記 林織江筆 文化元年(1804) 個人蔵



「伊良湖明神」「参海雑誌」(複製) 渡辺華山筆 原本は天保4年(1833) 田原市博物館蔵

◇神様となった磯丸

磯丸は、一生のうちにたくさんの歌を作りました。中でも「まじない歌」は、当時の人々の暮らし向きや磯丸の人がよく表れています。磯丸が詠んだまじない歌は、人々の願いや困りごとなどを誠心誠意、心を込めて歌にしたものです。磯丸に歌を詠んでもらい、その歌を石碑にしたり、掛軸にして床の間に掛けると、不思議とその願いが叶ったといわれています。磯丸は、その行く先々で歌を詠んでほしいと頼まれ、断ることもなく、それぞれの願いを歌にしました。

老若男女、身分、貧富を越えて、多くの人々に愛された磯丸は、嘉永元年(1848)、生まれた日と同じ5月3日に85歳で伊良湖の地で亡くなりました。

磯丸を慕う人々は神様としてお祀りすることを願い出、それが許され「磯丸霊神」の名前をもらいました。神様となった磯丸のために伊良湖の人たちは、「磯丸霊神の祠」をつくりました。この祠は、現在、伊良湖神社境内に「糟谷磯丸旧里」の石碑とともにあります。



磯丸霊神証書 神祇管領長上家 嘉永3年(1850) 個人蔵



磯丸陶像 尾州焼物師常滑小三郎造 弘化2年(1845) 個人蔵



磯丸墓



糟谷磯丸旧里の碑(右)と磯丸霊神祠